

昨年4月21日(土)に福島第一原発20km圏内を案内していただいた「野馬土」の被災地フクシマの旅実行委員会が年2回を目標に発行している新聞が届きました。転載、引用など自由ですので、周りの方に福島のことをお伝えくださいということですので、記事を紹介します!!被災者が作る原発に一番近い新聞です。

# 深刻な土壌汚染

浪江の駅東・権現堂から東京に避難中の門馬昌子さん

浪江の我が家の除染は2015年11月に庭と屋根が終わりました。結果報告によると、庭は地上1cmで毎時0.68～0.33 $\mu$ シーベルト、屋根は0.62～0.25 $\mu$ シーベルトでした。

避難している友人たちに「家に掃除に帰った時、花を植えてくるつもり」と話すと「土には触らない方がいい」と言われました。

2017年3月に週刊誌「女性自身」の和田秀子記者が「お宅の庭を測らせてほしい」と電話してきたので承諾すると、市民放射能監視センター「ちくりん舎」のスタッフと二人でやってきました。まず庭土の表面から5cmの深さまで金属製の直径10cmの筒を入れて土を取り出し、次に更にその下5cmの深さの土を取って行きました。

報告によると、覆土の部分5cmは1kg当たり400ベクレル以下でなければならないのに3,385ベクレルありましたし、その下の土は8,000ベクレルありました!!

二人の話によると、覆土(に使った土)は相双地区の山から持ってきたのだろう。山土は(山の)表面でなくても目が粗いから雨が降れば放射能は中に染み込んでいくとのことでした。

この結果は浪江町のもう一軒のお宅と富岡町のお宅の調査結果と共に同年3月21日号の「女性自身」に掲載されました。

私は町役場に「このままでは花は植えられない。20cmの深さまで再除染してほしい」と要求しました。

二度目の除染はやらないことになっていましたが、全国展開の週刊誌の威力で、やってもらえることになりました。11月中、3日間まず環境省のスタッフが土を掘り1cmまで近づいて空間線量を測り、 $\mu$

シーベルトで表しました。

その結果、高線量であることが判明し、待ち構えていた安藤ハザマ組の男性たちが私の見守る中、20cmの深さまで土地を掘り、フレコンバッグに詰め込んでいきました。

私は前もって、「覆土は要らない。自分できれいな土を買ってきて入れるから」と言っておきました。後日、昔この庭を造ってくれた庭師の岡田さんに頼み、きれいな土を入れ、その上に防草シートを被せ、さらに人工芝を敷いてもらいました。約60万円かかりました。

家の中は除染してもらえないので自分で掃除しましたが、それでも寝室は0.35 $\mu$ シーベルトあって住むのが恐いです。

友人が一人もいなくなってしまった浪江の我が家になぜ掃除に通うのか。それは浪江に帰れないまま亡くなった夫との思いでの詰まった家だからです。



除染した自宅の庭に立つ門馬さん

# 展示されているもの、 展示されていないもの

「東電廃炉資料館」を見学して 大内秀夫さん

東京電力が富岡町に「廃炉資料館」をオープンしました。これは大震災前の「エネルギー館」を改装したもので、かつて相双地方の住民や子どもなどが訪れ、そこで原発の安全が宣言されていました。

私は12月、資料館を訪ね、東電福島原発事故についての展示を見ました。

二階展示フロアは、2011年3月11日から11日間の福島第一、第二原発内で起きたことの記録で、何時何分と詳しい時系列で示し、再現映像を上映しています。

現場の懸命な作業が展示されているものの、大事故が起きた根本原因、原発設置、原発構造などの問題点は示されていません。

ただ大事故を引き起こし東電のこれまでのやり方に「おごりと過信」があり、08年、福島県沖津波予測15m試算などの際、「有効な対策を取らなかった」との展示は注目すべきです。これは各地の原発裁判で指摘されていることで、反省するなら裁判で否認するのではなく、東電側の責任を認めるべきです。

何より重要なことは事故の放射能汚染が福島県などへどう広がったか。原発敷地内の環境放射能レベルの簡単な数値が展示され、原発内の作業員の被ばく線量は年々減少しているグラフが示されていますが、それ以外はなく、原発敷地外のひばく、福島県民の被曝はまるで無かったかのように無視されています。

福島県などの動植物、農林牧畜水産業や住民の生活や経済に深刻な被害影響が及んだのですが、それについては「避難16万人」と一行だけ述べて、それ以外は全く触れられていません。

これでは資料館が掲げる原発事故の「反省と教訓」という大きなテーマは絵に描いた餅で、県民へ

の東電の責任は果たせません。

一階フロアは「廃炉現場の姿」として「燃料取り出し・燃料デブリ取り出し」への最新の状況を展示しています。

「30年から40年で廃炉」という大雑把なスケジュールが展示されています。しかし、壊れた原子炉には、そばに短時間いるだけで人の致死量になる高線量の融け落ちた核燃料デブリがあります。それを安全に取り出し、まだ決まってもいない場所に百年千年と保管するなど、誰もやったことのない作業は困難を極めるでしょう。展示されている開発中の新型ロボット等で上手くいく保証があるのでしょうか。

それ以前に原発周辺へどんどん住民を帰還させている現状に不安を覚えます。



資料館内部の展示物 右の人は人形です